



TITLE:

圖版 寫真版

AUTHOR(S):

---

CITATION:

圖版 寫真版. 地球 1924, 1(1)

ISSUE DATE:

1924-02-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182631>

RIGHT:

## 第一版關東地方等震線及地震構造線圖

は京都大學地質學教室の教官職員學生の被災後直に現場を踏査したのと、地方官衙に照會して得た被害報告とを基礎として試みに作つた。其の標準は家屋破損の有無を第一（強震）と第二（烈震）との境界とし、第三（強烈震）は全潰家屋土地の陥沒道路堤防の龜裂等を出した處を含み、第四（激烈震）は此等の損害更に甚しい處、第五（最烈震）は全潰家屋の多數に上り、地震と同時に火災をも起した如き損害の最も激烈を極めた處を含んだ。破壊家屋を出した部落の全戸數に對する割合を詳にせぬので此の階級の區別は嚴密でなく、又た三千餘通の質問牒に對して千通許りの回答を得たのであるから抜けた處があつて正確を缺いた憾がある。然れども震災後直に方々で公にした震域圖に比すれば全く趣を異にしたのは一目に瞭然と見えて居る。此の震害で最も顯著なる事實は甲府諏訪上田松代に延びた一帶と水海道から結城に至る鬼怒川流域一帶が一般烈震地域から離れて存在することである。

相模灣内に赤色等深線で示した海底の變化は海軍省水路部昨年十一月上旬の實測によつた。隆起といふのには深い處が單に淺くなつたといふ意味に解せられるものもある。

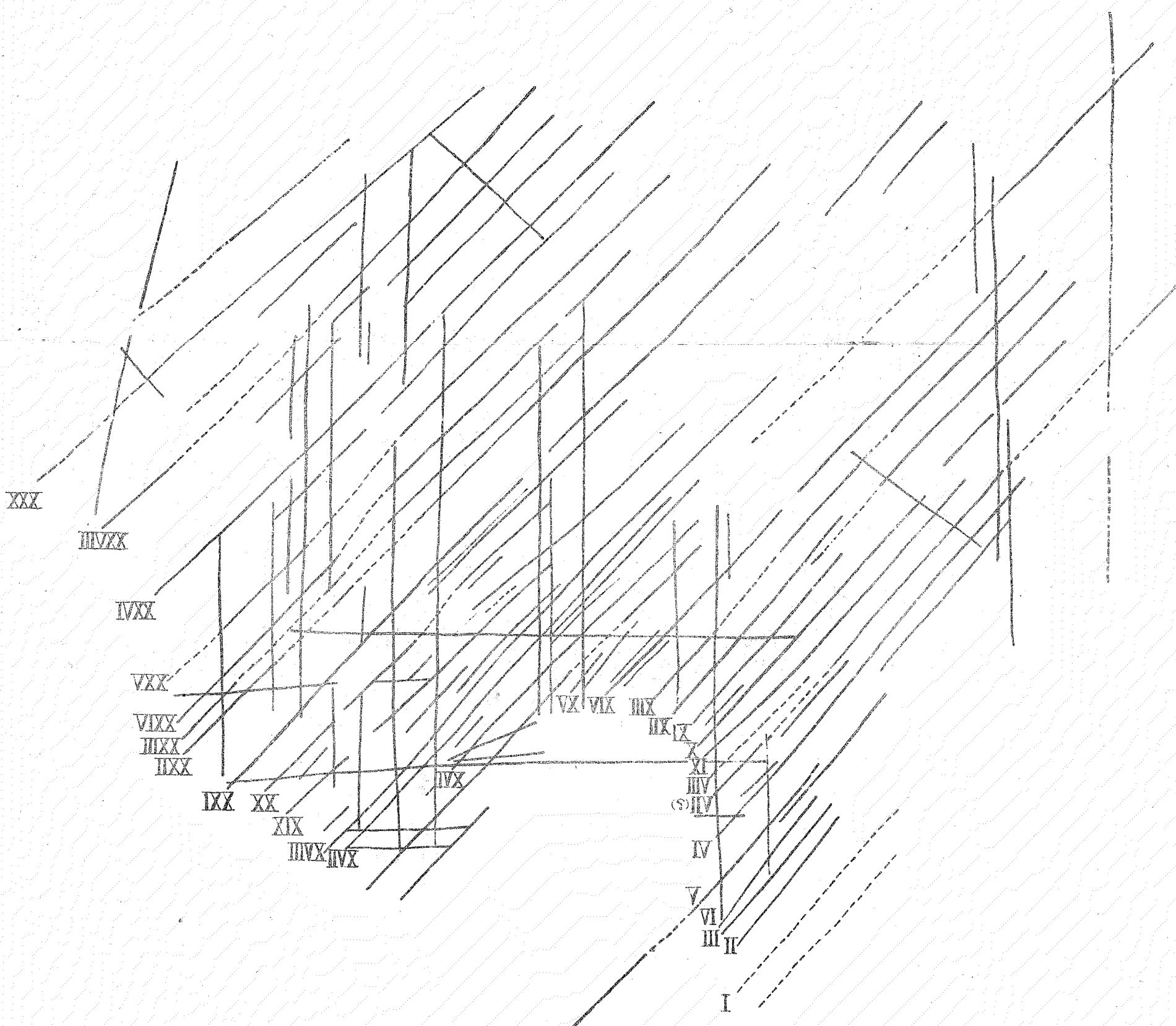
裏面に刷つた構造線は今回の震災によつて明かとなつた地震構造線を山嶽構造線と結び付けて見たもので、一部分だけは現場に於て追跡したもので其他は想定したものである。光に透かして見れば地震の被害と此等の線との間に疑ない關係のあることが明かとなる。（小川琢治）



關東地方等震線及地震構造線







——— 此圖辭意

1.



2.



(山嶺) 氷石のクスイム端北太樺北